
チェンジ。

若林夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チェンジ。

【Nコード】

N9864F

【作者名】

若林夏樹

【あらすじ】

自分の結婚式の前日、なぜか中学生の男の子に性別が変わってしまった千尋（女）。婚約者が担任をするクラスに転入することになり、千尋は正体を隠しながら生活していく。そして正体がバレたとき……ラブコメですが、少し切ない物語。タイトル変更しました。

第1回 性別チェンジ

ここはどこだろう・・・？

あれ、私確か・・・すごく大切なことがあったような気がするんだけど・・・なんだっけ・・・思い出せないや。

っていうか、体だるっ！なんなのさ、まるで・・・自分の体じゃないみたい・・・

「おい・・・そろそろ起きろや」

「ん・・・」

誰かの声に気がついて目を覚ますと、そこは知らない天井が広がっていた。しばらく呆けていると、ぬつと声の主が顔を出してきた。「あ、ほんとに起きた。大丈夫か？」

茶髪でいかにも現代風な男。あれ・・・この人をどこかで見たことがあるような気がする・・・

「まずは自分の名前と生年月日と年齢を言ってみろ」

「え・・・田中千尋・・・6月12日生まれ。24歳」

「よし」

何がよしなのかはわからなかったが、そう言うことによって千尋自身の頭もはつきりとしてきた。

「何か大事なことを忘れてないか？」

「大事なこと・・・うん、そう、それをさっきから思い出そうとしてるんだけど・・・」

「10月15日」

男の言葉でようやく千尋は全てを思い出した。

「そうだ！私明日結婚式なんだ！やだ・・・もうなんでこんな大

事なこと忘れたんだろー……って、今日14日よね？」

確認するように訊ねると、男は少しだけ困ったような顔をした。
もう千尋はその人物の正体を知っている。婚約者の親友、村瀬高明^{たかあき}だ。

「村瀬……？どうしたの？」

「あのな、よく聞け。お前は今男だ」

一瞬何を言われているのかわからなかった。何言ってるんだろ、村瀬のヤツ。もしかして自分のことが好きで気を引いているのかもしれないと思い始めたとき、村瀬は千尋の目の前にどんっと大きな鏡を出してきた。

「これが証拠だ」

鏡には、中学生くらいの男の子が映っていた。

千尋はしばらく少年と目を合わせながら、ゆっくりと右手を上げてみた。すると鏡の中の少年も同じように手を上げた。

それからすばやく動いてみたが、やっぱり鏡の少年も同じ行動をした。

「はあっ！？どういうこと！？」

「見たままだろ。お前は男に性別チェンジした。以上」

「以上じゃないよ！ちゃんと説明してよ！村瀬！」

信じられなくて目の前の村瀬に向かって怒鳴りつける。

「俺だってよくわかんねえよ。ただ1ヶ月前、貴也から連絡があつてお前が行方不明になったことを知ったんだ。で、なんでかお前が中学生くらいの男になった変な夢ばつかみだから、おかしいと思って夢で見たこの場所まで来たらお前が寝てたんだよ。俺の見た夢と同じカッコでな」

千尋は頭が真っ白になっていくのを感じた。

「あー・・・俺今まで言わなかったけど、なんつーか正夢体質つちゅーか、ちよつと変わった夢を見るんだよ。まあ気にするな」

村瀬の言葉なんて入ってこなかった。

なんで？なんで？ありえない・・・・・・・・・・！！

「——1ヶ月前って・・・・・・・・今何月なの？」

「11月14日。田中がいなくなってからちょうど1ヶ月だ」

「私どうしていなくなっちゃったの・・・？結婚式の前日は・・・っていうか、朝は貴也の家にはずだけど」

千尋はそのときの光景を思い出していた。朝貴也の家に行つて、まだ朝ごはんを食べていない彼のために台所に立つて・・・・・・・・・・立って、それから？

「とにかくお前が田中なら話は早いな。1度貴也に会いに行けよ。あいつずっと元気ねえんだ」

村瀬の言葉に、千尋はただ頷くしかなかった。

体を触ってみてもよくわかった。自分は本当に男になってしまっただと——

第1回 性別チェンジ（後書き）

こんにちは！

基本的にはラブコメですが、ちょっと深い話に
していきたいと思っています。
感想頂けると嬉しいです。

第2回 再会

1ヶ月ぶりに訪れた婚約者の家はなんだか寂しそうに見えた。

村瀬にお願いして一緒に来てもらい、千尋はインターホンを押してみた。

『はい』

出たのは以前にも聞いたことのある、婚約者の母親の声だった。

「こんにちはー。村瀬です」

『村瀬君ね。どうぞあがって』

ドアを開けて歓迎してくれたのは、見間違えようのないお義母さんになる予定だった人だ。千尋と目が合ったが、もちろん気づいてもらえることはなかった。自分はもう全く顔の違う少年になってしまったんだから。

お義母さん、少し痩せたな……

「貴也なら2階にいるわ」

「うん。あ、こいつ俺の弟子みたいなもんだからよろしくね」

軽い調子で村瀬は答えた。

「……私がいなくなったことで、みんなにすごく迷惑かけちゃったんだね……」

階段の途中でひとり言のように呟く。

「前日だけマシだろ。当日だったらもっと面倒なことになってたな」

村瀬はひょうひょうと答えた。

いざ貴也の部屋の前に来ると、やっぱり緊張してきた。だけど、会いたいという気持ちは変わらなかった。

「貴也ー入るぞー」

相手の返事を待つことなく村瀬は部屋のドアを開ける。貴也の匂いがした。

「お前休みだからってゴロゴロしすぎだろ。おら、起きろ起きろ」

「なんだよ・・・いきなりだなー」

ベッドから起き上がったのは、真正正銘自分の婚約者、今井貴也だった。それだけで千尋は泣きたくなってしまった。

貴也、よかった・・・元気そうでよかった・・・

「あれ、その子どうしたの？まさか誘拐、とか？」

貴也の視線が千尋に向けられた。思わずどきつとしてしまった。もろに目が合ってしまった、千尋は顔面が真っ赤になってしまつたのをなんとか抑えた。

「なわけねえだろ。弟子だ弟子」

村瀬は図々しくベッドに座り込んだ。

「弟子なんだ。名前なんていうの？」

屈託のない笑みで訊ねる貴也は全然変わっていなかった。照れ屋で不器用で子供が大好きでちょっとヤキモチやきで優しくて気配りができて寂しがり屋で・・・それから大好きで・・・結婚したかった・・・この人と。

「あれ・・・なんかどこかで見たことがある気がするなあ」

急に貴也がそんなことを呟いたので、千尋はどきつとしてしまった。もしかして自分のことがわかるんじゃないかと思ったとき、「あ」と貴也が声をあげた。

「思い出した。今度ウチのクラスに転入する矢吹孝太君やぶき こうたじゃない？」

違つと言いそうになったところで、村瀬に腕を引っ張られてなぜか部屋の外まで連行された。

「お前、田中じゃねえのかよ」

「田中千尋だよ。誰だよ矢吹って・・・」

「ほんじゃ、よくドラマとかである体が入れ替わったとかいうもんなんじゃねえの？だとしたらお前の体のほうに矢吹ってのがいるはずだけど」

「どうしたの？2人とも」

ドアを開けて貴也が顔を出す。千尋と村瀬は慌ててなんでもないうちに貴也の部屋に入ってしまった。

「にしても2人が知り合いだったなんてな・・・あ、俺は矢吹君の担任の今井貴也です。よろしくね」

「よ、よろしくお願いします」

初めて貴也の前で発した言葉だった。なんとなくあさつての方向を見てごまかしていると、千尋の目にそれは映った。

——昔千尋が無理やり飾った、2人の写真・・・それから指輪。

慌てて貴也を見ると、彼の左手薬指には2人で買った婚約指輪がはめられていた。じゃあ、この指輪は・・・私の？

「それ、俺がつきあつてた人だよ」

千尋が写真を見ていることに気づいたのか、少しだけ寂しそうなトーンで貴也が話した。

「この指輪は・・・？」

「うん。彼女が忘れてったものなんだ」

違う。こんな大事なもの忘れてったりしない。

千尋はそのときのことを思い出していた。朝ごはんを作るために台所に立ったとき、指輪が汚れるのが嫌だったからはずしたんだ。

きつとその最中に自分がいなくなつて——

まるで別れを告げるように、結婚前日にいなくなっただ．．．

「そろそろ田中のこと踏ん切りがついたか？」

村瀬の言葉に、貴也は声にならない声で呟いた。

「．．．．．なあ、村瀬．．．．．なんで俺、嫌われたんかなあ．．．
．．．．．」

第2回 再会（後書き）

そんなに重い内容ではないので、
次も気楽に読んでくださると嬉しいです……

第3回 入れ替わった体

「いなくなっただってわかったときの貴也の慌てぶりはすごかったよ」
帰り道、村瀬がぽつぽつと語り出すのを千尋は聞いていた。

「急に台所からいなくなっただけだろ？それも婚約指輪置いて。最初はなんかあつたんじゃないかって走り回ってた」

千尋は黙って聞く。

「1日中捜して、警察にも連絡して、でもやっぱり見つからなくて・・・それでもあいつは捜し続けた」

そういう人なんだ、あの人は。そういう人だから好きになったんだ。

「貴也・・・周りからいろいろ言われなかった・・・？婚約者に逃げられたとか、結婚詐欺だとか・・・」

村瀬は「まあな」と頷いた。

「でもあいつの人柄で直接言ってたのは俺ぐらいだけど、カンのいい奴だから周りがそう言ってたことに気づいてただろうな」

そんな場面が想像できてしまつて、千尋は泣きたくなった。あんなに優しい人がどれだけ苦しんだだろうか・・・

「っていうか、まさか俺んち来るんじゃないだろうな」

今さらだが、2人は村瀬の家に向かっていた。

「だって他に行くところないんだもん」

「あのなあ・・・いくら今男だからって、ダチの彼女泊めるわけにはいかんよ」

変なところで律儀な男だ。

「じゃあどうすればいいの・・・」

千尋はこの先どうすればいいのかわからなくなっていた。このまま村瀬に見捨てられれば、完全に路頭に迷うことになる。

「矢吹孝太んちにも行けばいいだろ」

「家がわかんないのに行けるわけないじゃん」

「たぶん俺わかる」

千尋が驚いて振り返ると、村瀬はさっさと方向を変えてどこかに向かおうとする。

「ええっ！今から行くの！？」

「当たり前だろ。もしかしたらそこにお前の体もあるかもしれないだろ」

なるほど・・・感心して、千尋は慌てて村瀬についていくことにした。矢吹孝太の家へ・・・

村瀬の家の近所に最近新しい家が建ったらしく、そこに住む人が以前挨拶に来たことがあるそうだ。そのときに確か「矢吹」だと言っていたような気がする・・・らしい。

まだ矢吹孝太の住む家かどうかもわからない話だ。
それなのに、

ピンポン

村瀬はためらうことなく呼び鈴を押した。

「もしもし」

「こんにちは。あの、矢吹孝太君が道に迷ってたみたいなんで連れてきました」

「え！もしかして、女性の方ではありませんか！？」

なんだか話がおかしい。まるで千尋の状況を知っているかのよう

だ。

玄関の扉が開くと、出てきたのはまだ若い女の人だった。とても綺麗な人だ。

「やっぱり・・・孝太！」

そんな人がいきなり初対面の千尋に抱きついてきた。

「よかった！このまま見つからなかったらどうしようかと思ったわ」
「えっえっ!？」

混乱する千尋の目の前に、さらに混乱する光景を目の当たりにすることになる。

なんと自分自身が目の前に困惑した表情で立っていたのだ。

「わっ・・・私!？」

「うん。中身は俺だけだね」

自分の声で、誰か知らない人が喋った。

話をまとめるところだ。

どうやら田中千尋の精神と矢吹孝太の精神が何かのきっかけで入れ替わったということだった。

「何がきっかけかは俺にもわかんないんだ」

男口調で千尋の体をした孝太が呟く。

「ただリッキーの散歩に行ったところまでは覚えてる。気がついたら家の庭で寝てたのを母さんに起こされたんだよ」
リッキーというのは飼っている犬の名前らしい。

「お姉さんは今仕事してるんですか？」

「ううん。してないけど」

結婚するので退職したのだ。そう思いながら、千尋は貴也のことを思い出していた。

「よかった……でも俺はもうすぐ学校があるんです」

その言葉に千尋はなんとなく嫌な予感がしてきた。

そんな千尋を察したのか、代弁するかのように村瀬が話し出す。

「要は、代わりに学校に行けって話だろ？」

「はい。しよっぱなから不登校なんて嫌ですから」

[illegible]

「決定だな。それが嫌なら早くきつかけを思い出せよ。そうすりゃ元の体に戻るかもしれないな」

強引に村瀬が話をまとめてしまう。

11月14日、この日田中千尋（女）14歳は、中学2年生（男）に逆戻り（？）した。

第4回 転校初日

最初は全然ついていけなかった中学生の男の子の体は、何日寝てもそのままだった。千尋は朝起きて元の体に戻っているという期待をだんだん持てなくなってきた。

そして、今日も……やっぱりそのままだった。今日から学校だというのに……

それにしても親の仕事の都合とはいえ、ずいぶん変な時期の転校だった。

千尋は手際よく制服に着替えると、1階の居間へと降りていった。

「おはようございます」

「おはよう。ちよつと待っててね」

今こうして孝太の家にお世話になっている。結局村瀬はあれから姿を現さないし、このまま一生この生活が続いたらどうしようかと半ば本気で考えていた。

「今日から学校だけど……くれぐれも気をつけてね」

先に顔を洗ってきたらしい孝太が念を押してくる。この言葉は前日までに耳にタコができるほど聞かされている。

「大丈夫。とにかくあんまり目立たないようにしてくるから」
自信のない言葉だった。

孝太の通う中学校は、千尋にとっても母校だった。だけど、当時の先生はほとんどがいなくなっていて、千尋の苦手としていた体育の女の先生だけは一目見ただけでわかった。

「こっちだよ、孝太」

貴也はいきなり呼び捨てにしてきた。受け持つクラスの生徒を呼び捨てにしているのかもしれない。

「緊張しなくても大丈夫だよ。みんな面白い人ばかりだから」

「あ、あの・・・」

「ん？」

千尋は貴也の左手薬指を見ていた。だけど、やっぱり何も言えなくて首を振るしかなかった。

「じゃあ行こうか」

何も知ることのない貴也は、千尋を自分のクラスへと案内していた。

2年5組。今日からそこが千尋の新しいクラスだった。

「矢吹孝太です。よろしくお願いします」

自分の体じゃないと思うと、人前で挨拶しても全然緊張しなかった。むしろ貴也が担任のクラスに入るといふことのほうが緊張を千尋にもたらしってくる。

とにかく目立たないように過ごそう・・・

窓際1番後ろの空いた席に腰掛けると、そこから教室全体を見渡すことができた。

「ねえねえ、矢吹君ってどこから来たの？」

いきなりそんな突拍子のないことを訊かれ、気がつくとな隣に座っていた女の子から声をかけられていたことがわかった。

「え・・・つと東京」

かわいい子だなあと重いながら千尋は返答する。

「東京？いいなあ・・・私1度でいいから渋谷とかに行ってみたいんだよね。やっぱ人が多いの？」

千尋は東京出身ではないので少しだけ戸惑う。

「あ、うん。でもいつもあんなカンジだよ」

「へー！じゃあ今度東京行ったら案内してね」

千尋が頷くと、その子は満足そうになつこりと微笑んだ。

「私、高原南。よろしくね」

「うん。こちらこそよろしく」

千尋にとっては同性だが、孝太にとってここで初めての異性の友達ができた。

——と、そのときは思っていた。

事態が急変したのはその日の放課後だった。千尋が帰ろうとバッグに用具をつめているとき、南が現れた。

「矢吹君、今ちよつといい？」

「あ、どうかした？」

手を休めて、千尋は南に向き直る。

「矢吹君って彼女とかいるのかなあ？」

「・・・？いきなり何を言い出すんだ、この子は。」

「いないけど（たぶん）」

「じゃあ、私を彼女にしてくれないかな！？」

はあ！？千尋はどこぞのマニアック映画でも見ているような気分になつた。

「え・・・いや、だって今日会ったばかりだよ・・・？」

「そんなのカンケーないじゃん。好きになっちゃったもんはしょうがないの」

ひるむことなく彼女はにつこりと笑つて言い放つ。だが、その表

情に少し照れも見られるのがわかった。

「だから・・・考えといてね！」

そう言っ、南は教室を飛び出していく。

いや・・・ちよつとマテ。そんなことできるわけない・・・

だっ、だっ、だっ・・・私女の子なんですからー！！！！！！

第4回 転校初日（後書き）

最後の言葉がギター侍のようですね。

第5回 騙してる

勢いよく職員室の扉を開けると、何人かの先生が不思議そうな表情でこつちを見てきた。特に、千尋の苦手な体育の先生は怪訝けげんそうだった。

そんなことにも構わず、千尋は一直線に貴也の机へと向かっていった。

「どうしたの、孝太」

貴也も何事か驚いている。

「あ……いえ、あの……なんでもないです」

今さっき女の子に告白されましたなんて恥ずかしくて言えるわけがない。貴也を前にすることによって、千尋はようやく落ち着いていくのを感じた。

「2年5組はどう？」

「みんないい人たちです。すぐに友達ができました」

「そっか……よかったな」

そのときの貴也のはにかんだように笑う表情が、千尋が以前見た光景と重なった。

あれは確か、去年のクリスマス。貴也からもらったクリスマスプレゼントに千尋が大喜びしたときに見せた表情だった。

だめだ……思い出したら悲しくなってきた……

「そうだ。簡単に学校案内しとこうか」

貴也はすくつと立ち上がって、千尋を職員室の外へと連れていった。

一通りの教室を案内してもらい、大体の位置を覚えたところに、知らない女子生徒が現れた。彼女はまっすぐに貴也に向かってくる。「今井先生！私と結婚してください！」

千尋は鼻から牛乳が出るような錯覚を覚えた。
はああ！？なに今の・・・錯覚？

対する貴也は困ったように笑っているだけだった。

「先生優しいからまた騙されちゃうよ！私が守ってあげる！」
騙されるってひょっとして私が？そんなことするかあああ！！
「私本気なんだから！」

「ありがとう」

貴也の出した言葉に、千尋は啞然とし、女子生徒は嬉しそうに微笑んだ。そして、

「約束ね！」

と言い残して、足取り軽やかに去っていった。

「約束しちゃっていいんですか！？」

まさか貴也の心がこんなに変わりやすいなんて思わなくて、思わず千尋は抗議をしてしまう。

「彼女は騙してなんかいいです！絶対に！！」

もちろん自分のことだから断言して言えることだ。

貴也はしばらく無言だったが、やがて少しだけ寂しそうに笑った。
「誰にも言わなかったけど、みんな知ってるんだな・・・孝太は？村瀬に聞いたの？」

「い、いや・・・その・・・」

もごもごと言うと、また貴也は笑った。

「うん・・・彼女はそんな人じゃないって信じてる・・・.. けどもし本当にそうだったとしても、俺の気持ちに変わりはないよ。それぐらい好きだ」

こんなセリフ、今まで聞いたことがなかった。だから嬉しくて頬が赤くなるのを俯いてごまかした。

「・・・その言葉彼女に言っただけでください」

「えええ・・・照れるなあ。普段だったら絶対言えないけど・・・. また会えるためだったら何度だって言えるよ」

言いたい。自分が田中千尋だって・・・. だけど信じてもらえないだろう。

なんだか騙しているような気がしてきた。

「不思議だな。孝太にならなんでも話せるような気がするんだ。ありがとう」

その貴也の言葉が嬉しくて切なくて、なんだか涙が出てきそうになった。

孝太の家に帰宅すると、いつから来ていたのか村瀬がいた。彼は大学卒業後就職せず、今はフリーターとして毎日の食費を稼いでいるらしかった。

いつも不思議に思うのだが、村瀬とつきあう女は大変なんじゃないかと思う。

「よっ！元気にしてるか？」

いつものように軽い調子で村瀬は声をかけてきた。

「なによ・・・冷やかに来たんなら帰ってよ」

「うわ・・・なんだその言い方。心の友に向かつて」

意味不明である。

ちょうどそのとき2階から孝太が降りてきて、千尋は南に告白されたことを思い出した。

一応本人に言ってから断るべきだと思い、貴也からもらった学級写真を見せて今日の話を話した。すると・・・

「へえ・・・かわいいじゃん。まさか断るなんて言わないよね？」

それは千尋にとって意外な言葉だった。

「当たり前じゃん。だって今日会ったばかりだし、私女だよ？」

「会った初日につきあうことなんて珍しいことじゃないよ。それに体は男だ。学校ではお姉さんは矢吹孝太として生活しなきゃだって」

つまりどういうことだ・・・？

「つまりその女の子とつきあえって話だろ」

村瀬がとんでもないことを口にして、強引に話はまとまった。

第5回 騙してる（後書き）

なんだか同性愛のような展開になってきました；
本人たちにそのつもりはないんですけどねー……

第6回 対面した4人

学校に行くたびに、隣に座る高原南の視線が気になり、千尋は複雑な気持ちになっていた。

元をたどればなんで自分は男になったんだろう・・・？

例えばドラマだと、階段が何かから落ちたらその拍子に入れ替わるというのがお決まりのパターンだが、そもそも千尋は何が起こったのかさえ覚えていない。

戻りたいなあ・・・

窓の外を見てぼんやりと考えていると、自分の座る机に何か投げられたのがわかった。よく見ると、それはノートの切れ端を切った手紙のようだった。

「・・・」

先生にバレないように見てみると、かわいらしい字で文字が書かれている。

——あのことを考えてくれた？

隣の南を見たが、彼女は気づかないフリをして授業に専念している。

来たな・・・とうとうこのときが。

——もうちょっと考えさせて

そう答えることしかできなかった。南を傷つけるかもしれないとどきどきしながら返事を待ったが、彼女の返答は、

——うん ゆっくり考えて

その言葉に少しだけ安心した。

それにしてもこの先どうしよう……

今時屋上を開放している中学校なんて珍しい。千尋は高い手すりにもたれかかってこれからのことを考えていた。

・このまま男として行き抜く

・……そんなのやだ。私は貴也と結婚したい。

・いつそ貴也に正体をバラしてしまう

・……でも貴也は信じてくれないかな？

・南とつきあってラブラブになる

・……ありえない……早く戻りたい！

よしっ！貴也の家に行って軽くシュミレーションをして思い出そうと思ったときだ。運動場を1人の女の人が歩いているのが見えた。その人はまっすぐに校舎へと向かっていく。

あれは……私だ！矢吹孝太が学校に来ているのだ。

なんで？学校には来ないって言ってたのに……

千尋は慌てて階段を駆け下りていった。

その頃、矢吹孝太は自分が通うはずだった中学校まで来ていた。

担任が千尋の婚約者だと話は聞いていたが、好奇心でその人物と高原南を見に来たのだ。

一応変装はしてきた。家にあった眼鏡に、母に協力してもらって髪型も変えてみた。野球帽を深くかぶってし、たぶんバレないだろう。

それに最終手段もある。

「よしっ！」

気合だけ十分に、孝太は歩き出した。

しかし、制服でない人物が歩いているのはただでさえ目立つ。昇降口ですでに孝太はダウンしてしまった。

「孝太君！」

ちようどいいところに助け舟がやって来た。孝太はのんきに手を振って千尋を出迎えた。

「なんでこんな所にいるの!？」

「家でじつとしているのにあきちゃって」

「だからって見つかったらマズいよ・・・もし知ってる人が来たら・・・」

と、そのときだ。下駄箱に1人の少女が現れた。

一瞬マズいとおもったが、孝太の姿を見られて困る人ではなかった。なるべく平静を装って千尋は話し出した。

「え・・・つとこの人は・・・」

「恋人なの・・・?」

ぼつりと呟いたのは、他ならぬ彼女だった。

「矢吹君にはもう好きな人がいたんだね・・・私なんか告白しても無駄だったんだ」

「ちっ違う!この人は・・・知り合いのお兄さんの婚約者で・・・高原さんが思うようなものじゃないって!」

千尋の弁解に南はしゅんとなっていた表情を少しだけ明るくさせた。同時にそれが恋する乙女の表情にも変わる。

もしかして・・・この子が千尋さんの言ってた俺のことを好き

な人か・・・？

写真で見るのとは違う。余計にそのかわいさが際立っていた。

だから思わず言ってしまった。

「俺とつきあってください！！」

千尋の体で、男口調で。見事にヘンタイ女の出来上がりだった。

しかも、その場面を他に見ていた人物がいたのだ。

「・・・・・・・・あれ、孝太に南。何やってるの？」

現れたのは孝太も学級写真で知っている、担任の今井貴也だった。彼は生徒2人に問いかけながらもまっすぐに孝太のことを見ていた。

自分の婚約者と2ヶ月ぶりに対面したから・・・・・・・・

第6回 対面した4人（後書き）

とうとう貴也に姿を見られますが…
本格的に動き出すのは次以降の予定です。

第7回 事故の跡

千尋は心臓が飛び出すかと思うほど緊張していた。目の前に貴也がいて、孝太（千尋の本体）をじっと見ているからだ。

やばいやばいやばい・・・これ絶対バレたよ・・・！

しかし、貴也はしばらく孝太を見た後、千尋へと視線を向けてきた。

「・・・孝太、何かあったの？」

「え・・・いや、ただ知り合いが遊びに来ただけというか・・・」
「もともと答える間に、孝太はダッシュで逃げ出した。それを見て千尋はほっとしたが、なんと貴也はその後を追おうとしたのだ。」

「先生！」

思わず呼び止めると、貴也の体は止まった。その間に孝太が走り去るのを見て、貴也は追いかけるのをあきらめたらしい。

だけど明らかにその表情は何かを考え込んでいる様子だった。

そのときの千尋の予感はずだった。貴也はそのときのことをずっと考えることになる。

いよいよ思い出さなきゃいけないと思い始めたときには冬休みになっていた。

23日、千尋は1人で貴也の家の横を通る道路まで来た。貴也の話だと、リッキーの散歩コースはすでに決まっていて、いつも貴也の家の横の道を通ることがわかった。
きつとここに何かある。

——と、思ったものの特に何もなかった。

そつだ。料理を作っていたのになんで道路に出る必要があるのだろうか。

千尋は思い直して帰ろうとしたときだった。

「……………」

少し離れた道路の色が変色していることに気づいた。近づいてみると、それは血のように見えた。

もしかしてここで事故があったとか……………？

「あれ……こんなトコで何してんだよ」

その声にはつとして振り返ると、ちららそうな男がきょとんとした表情で立っていた。村瀬だった。

「村瀬……私もしかしたらここで事故ったのかもしれない」

「は？」

「だってここに血の跡があるの。私と孝太君のものかも」

しばらく村瀬は何も言わなかった。ただ血の跡を黙って見ていた。「そつだとしたらお前らは事故った拍子に入れ替わってことになるな」

「絶対そつだ！ねえお願いがあるんだけど、ここで事故がなかったか貴也に訊いてみてくれない！？」

「いいけど、一応矢吹にも確認してみよう」

千尋は頷いて駆け出していく。

微かな希望が見えてきた気がしてきた。思い出せば何かわかるかもしれないと期待していたからだ……………

事故ったかもしれないと言う千尋の言葉を考えながら、村瀬はその場にしばらく立っていた。

「村瀬！ごめん。待たせた」

そこに自転車に乗った貴也が現れた。村瀬が今日ここに来たのは貴也に呼ばれたからだった。

「よお。人呼んどいてのんきに買い物かよ」

「悪い。特売日だったから」

どこの主婦だ。ツツコミどころは満載だったが、あえて無視して村瀬は歩き出す。そして、なんでもないように話し出した。

「なー貴也。１ヶ月くらい前にここで事故とかなかったかー？」

「事故？さあ、聞いたことないけど」

やっぱりな。村瀬はなんとなくわかっていた返答に特に驚くことはなかった。

「俺も訊きたいことがあるんだ」

村瀬は振り返る。貴也が真面目な表情でこっちを見ているのがわかった。

「俺の精神状態ってイカれてないよな？」

「なに急に」

「いや・・・千尋に似た人が俺のクラスの女の子に告ってたから」

あのバカ。なんでそんなややこしいことになってるんだ。

表情には出さなかったが、村瀬は心底呆れていた。その様子だと孝太（千尋の本体）を見たことがわかる。

「田中が女好きだとは知らなかったな」

自嘲気味に村瀬は言った。

「ごめんな。俺どうかしてるわ。これだけ訊くためにお前のこと呼び出したりしてごめんな」

「いや。俺なんもできねえけど話ぐらいは聞けるからな」

「ほんといいヤツだな。昔から」

「おい。今頃気づいてもおせーよ」

2人は笑ったが、村瀬は貴也が本気で笑っていないことに気づいていた。

いいヤツ・・・そんなんじゃない。だとしたら今きつと自分はここにいないって村瀬はわかっていた。

これは俺のわがままなんだ。

第8回 バレた（前書き）

ええつと…千尋はただ体が入れ替わっただけなので『性別チェンジ』
したわけではありません。
いわゆるオチで使っています。

第8回 バレた

家に帰ってすぐに、千尋は貴也の家の近くで見た血の跡らしきものの存在について話してみた。それに対する孝太の反応は意外にも薄いものだった。

「事故った記憶なんてないけど」

「それはそうだけど・・・もしかしたら事故のショックで忘れてるだけかもしれないじゃん！」

熱を込めて話すと、「そこなんだよね」と孝太が真剣な顔つきになった。

「リッキーがちゃんと家に帰ってきてた」

「どういう意味？」

「俺が覚えてない空白の時間、リッキーは1人で家に帰ってきたって母さんが言ってた。俺は庭で寝てたのに」

ようやく孝太が何を言おうとしているかがわかった。

「何か忘れてるみたいだね。私も台所にいたところまでは覚えてるんだけど」

事故に遭ったとしたら、自分が道路に出たということになる。なんのために出たのかわからない。

思い出すにはまだ何かパーツが足りないらしい。

そして翌日、クリスマスイブになった。去年は貴也と過ごしていたことを思い出し、千尋は少しだけ悲しくなってきた。

だけど、どこかに出かける気にもならず、家でごろごろ過ごそうと思っていたときだ。

「千尋ちゃん。お友達が来てるわよ」

孝太の母の言葉に玄関まで行くと、そこには高原南の姿があった。こないだの一件以来まともに会話していなかった。

「ごめんね。突然来ちゃって・・・今井先生に住所教えてもらったの」

「そ、そうなんだ。どうしたの？」

南はすごく言いにくそうにしている。できるならそのまま何も言っ
てほしくなかった。

「明日もしよかったら一緒に遊びに行かない？」

さすがに迷った。頭の中でいろいろなもの格闘し、ようやく答えは決まった。

「うん。いいよ」

「ほんとっ？ やったあ！ 嬉しい」

こんなに嬉しそうにされたら断ることなんてできない。

どこで待ち合わせるか簡単に話し合ったところで南は帰っていった。わざわざ住所まで聞いてここまで来てくれたことから本気で孝太のことが好きなのだろう。

そついうのは悪くない。好きになってもらえるのは嬉しいことだ。まずい・・・なんか流されてる自分があるなあ・・・

「千尋さん、どこに行くんですか？」

南とのさっきのやり取りを聞いていたらしい。さつきから孝太はしつこく千尋にいろいろと訊ねてくる。

「だーから、村瀬の家だって言ってるじゃん」

「俺も行きます」

今日の村瀬のバイトは夕方だから、午前中に会いに行こうと思っていた。彼に昨日のことを訊いてくれたかどうか確かめるためだ。今さらになつて、村瀬の家の電話番号を聞いておけばよかったと後悔していた。

「来てもいいけど、ちゃんと変装してよ」
「わかつてます」

2人が村瀬の家に行ったが、呼び鈴を押しても応答がなかった。
「おつかしーなあ・・・まだ寝てんのかな」
「どっかに出かけてるのかも」

ケータイがあつたら便利だなと千尋が思っているとき、好奇心でなんとなく玄関の扉を開けようとしてみた。すると、

「開いてる」

無用心な家だ。千尋は孝太に目配せをした。

「えっ！勝手に入ったらいくらなんでもまずくないですか？」

「村瀬——いないの？」

返答はない。ただ静まり返った部屋があるだけだ。

「——千尋・・・・・・・・」

そんな声が聞こえてきたのは、暗い村瀬の部屋からではなかった。千尋と孝太の背後からそれは聞こえてきた。

振り返るとそこに立っていたのは——貴也だった。

彼はまっすぐに孝太を見ていた。
バレないように帽子と眼鏡で変装して顔がわかりにくいにも関わらず、貴也は正確に千尋だと判断した。

とうとうバレた。

第9回 出会いから結婚前日まで（前編）（前書き）

ちょっと番外編かもしれませんが…

少しでも恋愛っぽくしたいと思います。

第9回 出会いから結婚前日まで（前編）

出会いは高校2年生のときだった。

たまたま席替えをしたら、貴也の隣の席になり、彼の前が村瀬の席になった。それまでお互いあまり話したことがなかったため、最初はぎくしゃくしていたが、村瀬のおかげで貴也とすごく仲良くなることができた。

彼らはとてもモテた。スポーツ万能で、勉強ができて、そのうえルックスもいい。まるで漫画に出てくる男の子のようだ。

だけど、2人は親友でありながら正反対だった。

ちやらい村瀬は、当時いろいろな女とつきあっているという噂が絶えなかった。だけど、貴也は告白されても誰ともつきあわないことで有名だった。

「なんでつきあわないの？」

試しに訊いたみたことがある。

「ずっと片想い中だから」

はつきりと答えた貴也。その一途さに千尋は惹かれた。心から彼の好きな人が羨ましく思えた。

貴也の好きな人は上級生だとか大学生だとか噂が広がったが、どれに対しても貴也は曖昧にしか答えなかった。

千尋も訊いてみたくてたまらなかった。だけど、その瞬間自分の恋が終わることを知っていたから絶対にそれはしなかった。

だらだらと片想いが続いた。

気がついたら高校生活最後の日、卒業式を迎えていた。

最初は長いと思っていた高校生活は、過ぎ去ってみるとあっという間だった。

卒業式が終わってみんなが帰っていく中、千尋は最後まで帰ろうとはしなかった。

最後の1人になったとき、千尋はチョークを握って黒板に落書きをし始めた。すでに『みんなありがとう』と書かれた黒板にはそれほどスペースはなかった。

どれくらいたっただろうか。突然教室のドアが開いた。

びくつとして振り返ると、そこには貴也がいた。走ってきたのか息が荒い。

千尋は貴也を見たまま固まってしまった。黒板に『貴也のバカアホ ボケ 大好き』と書いてあった。

「バカ、アホ、ボケで悪かったね」

「い、いや。これは……」

慌てて黒板消しで消そうとすると、それを貴也によって止められる。そして代わりに彼は『貴也』の部分だけ消し、そこに『千尋』と書いた。

「あつ！そつちだつてやつてるじゃん！」

「読んでみて」

千尋の言葉を見無視して、貴也はチョークを置いて手を払う。

「……千尋のバカ、アホ、ボケ……」
大好き。

決まりの悪そうな顔で、貴也は頷いた。

信じられなかった。もしかして……もしかして……？

「えええええつ……」
変な叫び声をあげて、千尋は後ずさったが、やがて壁にぶつかってしまった。

「なんで？片想いだって言ってたのに」

「まさか両想いだとは思わないだろ」

「い、言つてよ……」

情けない声が教室に響く。

「今言つた」

けろりと貴也は言い放つた。

これが2人がつきあいだしたときだった。

この後、下駄箱というなんだかむさくるしい場所で初めてのキスをした。

お互いの大学は違ったが、2人は週末のたびにデートした。

キスだつてうまくなった、と千尋が思いながら唇を合わせていたときに、突然貴也の手が千尋の腰にまで下りてきた。

「——っ!？」

さすがに驚いて貴也を見上げると、彼はとまどつたようにごめんと謝ってきた。

気がつけば貴也の部屋に2人きりで、しかも今はベッドに腰掛けている状態だった。シチュエーション的にはばっちりかもしれない。も……もうちょっとだけ待つて……

小さな声でそう言った。怒るかどうか心配だった。

「うん。待つてる」

貴也は優しく微笑んでそう言ってくれた。

本当に待ってくれた。

千尋の決心がついたのはそれから半年後だったというのに、彼は文句1つ言わないでくれた。

旅行先のベッドに千尋は横になり、その上に貴也が覆いかぶさった。

「なるべく痛くないようにしてね・・・？」

千尋が頼むと、貴也は千尋の額に自分の額をこつんと当ててきた。「うん」

優しい瞳が頷いた。そして、ゆっくりと顔が動きキスが始まった。

貴也の手はまるで割れ物を扱うかのような手つきで優しくかった。

第10回 出会いから結婚前日まで（後編）（前書き）

貴也視点です。

第10回 出会いから結婚前日まで（後編）

学生の間結婚という言葉を意識したことはなかったが、社会人になって初めて考えるようになった。

23歳新米教師の貴也は、友人の結婚式に参加していた。中学のときは最も色恋に興味のなかった男が1番最初に結婚したのだ。

「俺は村瀬が最初だと思ったんだけどな」

新郎の沢村が正直にそう言った。貴也は、村瀬が中学のときに何人かの女の子とつきあっていたことを思い出した。

「ありえねえだろ。自分じゃぜってー結婚できないって思うし」

「そうでもないだろ。今井は？今彼女いるの？」

「えっ？」

別のことを考えていた貴也は驚いて顔を上げた。

「あ・・・ごめん。聞いてなかった」

「貴也は・・・最近彼女と濃厚な夜を過ごしてるのでそれどころじゃないんだよ」

村瀬が冗談でそんなことを言い、沢村がへっつとのってくる。

「やるじゃん、今井！」

「ちがつ！村瀬が本当のこと言うわけないだろ！」

親友だからこそ言える言葉だ。

「照れんな照れんな。こないだ俺が電話したとき最中だったなんて誰にも言わねえから安心しな？」

「村瀬、お前もう帰れ！」

その1週間後、貴也は千尋とデートした。正確には、彼女に買い物につきあつてほしいと頼まれたのだ。

千尋が行きたかった所は書店らしい。正確にはCDを買ったかったらしい。

「アルトのCDが昨日発売日だったんだ」

アルトというのは最近顔を出し始めた4人組のグループだった。千尋は彼らの大ファンなのだ。

千尋がCDを見ている間、ふと貴也は結婚情報誌を見つけた。今まで開いたこともないものだったが、周りに誰もいないことを確認して読んでみた。

それには、式場の情報や婚約指輪、様々なドレスなど、結婚に関わることが多く書かれていた。

貴也はいつのまにか真剣に見てしまっていた。

「何読んでるの？」

そんな声が聞こえてきても、貴也は特に考えることなく答えてしまった。

「んー・・・最近の式場ってすごいなあって・・・俺らもこういう所でいたいな・・・」

しばらくして、ようやく自分が何を言ったのか理解した。すごく恥ずかしくなってしまった。

「やつ・・・今すぐってわけじゃなくて・・・」

もごもと言いつつしていると、千尋は嬉しそうに笑った。

「うん！したい！」

「え・・・いいの？」

なんと外的なことを訊いてしまった。だけど、千尋は勢いよく頷いた。

「なんか嬉しい。貴也が考えてくれたことが」

ってなカンジで2人のプロポーズは書店で行われた。
貴也はもつと高級な店でそういうことをしなかったことに後悔していたが、千尋はすごく嬉しそうにしていたので良しとすることにした。

婚約指輪を渡したのは、一緒に遊びに行った観覧車の中だった。
本当はてっぺんで渡そうと思っていたのだが、照れくさくてなかなか言い出せず、結局終わりがけに渡すことになった。

「……………本当は1番上で渡したかったんだけど……………」
「おそっ」

だけど左手薬指にはめた指輪を見て少しだけ瞳を潤ませた。

「ありがとう……………ほんとに嬉しい……………」

このときの彼女を見て思った。この人を一生幸せにしよう。俺の手で……………」

守ろうと思った。貴也自身の手で千尋を幸せにしようと考えていた。
ただ、あの日それは起こった。

結婚前日、千尋は貴也の家にやって来た。ちょうど両親が仕事に行ってしまった、朝ごはんを作ろうとしていたときだ。

「じゃあ私が作るよ」

彼女の厚意に甘えて、自分は顔を洗うことにした。

そのとき誰かの悲鳴が聞こえてきた。

なんだ今の・・・？寝ぼけた頭ではそれ以上考えることができなかった。

だから、台所にいるはずの彼女に訊こうと思った。

「ねえ千尋。今なんか聞こえなかった・・・。」

言いかけたときだった。彼女がいらないことに気づいた。

「——千尋？」

そして、千尋は今・・・目の前にいる——

第11回 バレた後

ついにこのときが来た。千尋はどこかでこの日が来ることを恐れ、そして望んでいた。

貴也はもちろん千尋など見ていない。千尋の体をした孝太を見ている。

「貴也」

今は生徒と先生という関係だったが、千尋はためらうことなくその名を呼んだ。

「その人は千尋じゃない・・・私が田中千尋だよ」

その名前に反応したのか、貴也の瞳がこっちに向けられる。視界の隅で孝太がこくこくと頷いているのが見えた。

「ある事情で体が入れ替わっちゃったの。そこにいる私の体には矢吹孝太君がいる」

もちろん信じられる話ではないことはわかっている。だけど、こくなった以上本当のことを話すしかなかった。

覚えている限り全てのことを話した。その間、貴也は黙って聞いているだけだった。

話し終えても、貴也の反応はなかった。当たり前だろう。千尋だったらそんな話信じられない。

「信じられないのわかる。いなくなったことですごく迷惑かけたことも知ってる・・・もう婚約破棄されたってしょうがないって思ってる」

「やだよ、そんなの」

初めて貴也が口を開いた。

「正直ちよつと信じられない・・・体が入れ替わるなんてドラマの中の世界みたいだし・・・」

「じゃあ・・・貴也のお尻には昔木から落ちてついたアザが今でも残っている！・・・これは千尋しか知らないことじゃない？」

慌てたように貴也は孝太を見たが、彼は「俺知らないです」と言っ
つてかぶりを振る。

そのうち貴也はその場にへたり込んでしまった。

「た、貴也・・・ごめんね」

「いや・・・結構最悪なことまで考えてたから・・・とりあえず無事でよかった・・・」

こんなときにまで人の心配をする貴也は優しくてどうしようもなかった。

千尋は嬉しくて貴也の頭を抱え込んだ。

その様子を、村瀬はアパートの階段の隅から見ていた。

千尋と孝太にこの時間なら家にいると伝えてあったので、彼らが来ることは知っていた。それと同時に、村瀬は貴也も呼んだのだ。

つまり、3人がかち合うようにした。

正直板ばさみにあっているようで辛かったのだ。村瀬はこれで良かったんだと思う。

煙草に火をつける。煙を吸ってから一息つく。

さて・・・行くか。

何食わぬ顔をして村瀬はみんなの前に姿を現した。

今日はクリスマスイブということもあって、千尋は貴也の家に行きいろいろと話すことにした。

貴也が完全に信じているかはわからない。だけど、2人の思い出話に花が咲き、千尋は一瞬男になっている自分を忘れていた。

「でもほんとになんで入れ替わったんだろ・・・」

「あ、千尋がいなくなる前、俺顔洗ってたんだけど、そのときなんか悲鳴が聞こえたような」

「えっ！うそ！？」

何かを思い出すように貴也が仰ぐ。

「千尋に今なんか聞こえた？って聞こうとしたらいらないことに気づいて・・・」

「悲鳴・・・？」

そのとき、何かが頭の中に浮かんできた。それは、道路だった。貴也の家の横の道。意外に大型車も通る。トラック。鉄パイプ。

「千尋？」

はっとして我に返ると、心配そうな表情で貴也がこっちを見ていた。

「貴也、悲鳴の他に何か聞こえなかった？」

「んー・・・そのとき顔洗って聞こえなかったのかな・・・蛇口閉めたときに悲鳴は聞こえてきたから」

「そっか・・・ありがとう」

何かが変だ。何かを忘れてる。わからないけど・・・

「明日も会えない？また話がしたいんだ」

帰り際にそう言われて、千尋は明日南と会うことを思い出した。

「明日は・・・デート」

もともとこう言うと、案の定貴也にすごく驚かれた。

「え？誰と？」

「同じクラスの高原さん」

しばらく間があった後、貴也は納得したようにごくごく頷いた。

「楽しんできてね」

「もうどうすればいいのよー！これじゃ女の子同士のデートじゃん・
・・」

けらけらと笑っただけの貴也は絶対面白がっているようにしか見えなかった。

第12回 女の子とデート

ついにこのときが来てしまった。千尋は緊張しながら待ち合わせ場所に來ていた。もう少し遅く來ても良かったと少しだけ後悔していた。

寒いクリスマス。千尋は南と待ち合わせをしていた。向かう場所は映画館だった。

「見たい映画があるの」

そう言った彼女はとても嬉しそうだった。

「矢吹君！」

約束の時間5分前に南は現れた。クリスマスによく似合う白いコートが彼女にはよく似合っていた。

「よし。じゃあ行こっか」

「うん」

南は本当に嬉しそうだった。

歩きながら2人はとりとめのない会話をする。

「見たい映画ってなんなの？」

「えっとね・・・矢吹君、興味ないかもしれないけど・・・」

すごく恋愛！だと思ってしまう映画だろうと思っていたが、南が口にしたのは今話題になっている洋画だった。千尋も見たいと思っていた。

「いいね。見たい」

素直にそう言った後の南の嬉しそうな顔を見てなんとなくわかった。きっと男の子でも気軽に見れる映画を選んでくれたのかもしれないと・・・

そして、その後をまるでストーカーのように追う2人組がいた。

「先生がまさかストーカーだったなんて意外です」

「いや、相手が男だったら絶対行かせないけど、女の子相手だったら話は別だよ」

孝太から見ても、貴也がこの状況を楽しんでいるようにしか見えなかった。

「もしなんかあったらどうするんですか？高原さん、かなり俺のこ
と好きみたいだし、勢いでなんかあったら・・・俺はそのために来
てるんですけど・・・」

「千尋の体で俺って言われるとなんか新鮮だな」

「先生！真面目に聞いているんですか！？」

「聞いている聞いている」

ぼんぽんと孝太の頭を叩いて笑う。本当にこの状況がわかってい
るのだろうか。

「俺がここに来たのは、もし変な連中に絡まれたら俺が助けるため」
横顔を見て、孝太は貴也の心情がわかってしまい辛くなった。

本当に入れ替わった理由がわからない。孝太は千尋と面識がなく、
やっぱり偶然入れ替わったとしか考えられない。

あの日は普通にリッキーの散歩に出かけて、普通に歩いて、普通
に・・・？

「孝太、寒くないか？あつたかいものでも飲もうか」

「あ、はい」

孝太と貴也は近くに喫茶店に入った。千尋たちは映画館に入って
いったので当分は出てこないだろう。

孝太はホットコーヒーを頼んだ。それにいっぱい砂糖とミルクを入れるが、貴也も同じものを頼んでもブラックで飲んだ。

「先生は大人ですね」

「そうか？結構子供っぽいってよく言われるぞ」

はにかんだように笑いながら、貴也はコーヒーをすすする。

「孝太だつてその年でずいぶんしつかりしてると思うよ。俺が中学生のときなんかゲームで遊んでたことしか思い出せない」

「俺は・・・全然そんなじゃないんです・・・」

前の学校にいたときのことを思い出した。中学1年生のとき、明らかに自分のせいなのに、孝太は自分は悪くないと頑かたくなに否定したことがあった。そのときからだ。自分の周囲から友達がいなくなっていたのは。

母から転校を言われたときは、正直ここから離れられるとほっとした。それから、新しい学校ではもっと大人になろうと決心したのだ。

だけど、まだ新しい学校に行っていないのに、なぜか胸の中には新たな罪悪感が生まれている。これは自分の非を認めなかったあのときの感覚と同じ。

知らないうちに孝太はあのとと同じことを繰り返してしまっているのだ。

言葉にしたことはなかったが、孝太はそれがいつのことなのかわかる。

それは、初めて体が入れ替わり庭で母に起こされたとき。真っ先にその罪悪感が心の中で広がった。

その正体がなんなのかわからなかいが——・・・体が入れ替わったことと関係しているのかもしれない。

映画が終わってからは千尋も南も適当に辺りをブラついていた。千尋はこのチャンスを待っていた。ずっと言おうと思っていたことを言う決心がついた。

「高原さん」

「え、何？」

きょんとした顔で南が振り返る。

心の中で千尋は自分に気合を入れた。男口調を意識する。

「実は今、自分の中で1つの問題を抱えてるんだ。それが解決するまでは誰かとつきあうことは考えられない……ごめん」

「そっ……か」

「でも」

千尋は慌てて付け足す。

「きつといつか……俺のほうから告白するかもしれない。そのときは笑わないで聞いてほしいんだ……」

それは昨日の夜に孝太に確認したことだった。千尋が孝太に本気で南を好きか訊いてみたところ、彼は迷うことなく真剣な表情で頷いた。それを見て、今日こう言うと孝太の了承を得た。

南のためにも、早く元の体に戻りたいと心から千尋は思った。

第13回 花束

クリスマスの午後、村瀬はバイトを終えて、貴也の家の横の道路まで来ていた。

千尋が言っていた血の跡が以前よりも濃くなっているような気がする。そして、その他にブレーキの跡まで見つけた。

これはこないだは見つけられなかったものだ。

無意識に煙草に火をつけて息を吐く。

村瀬にはわかっていた。これが何を意味するのか。どうしてあの2人がこんなことになってしまったのか。

そして、2人が思い出したとき、どんな結果がもたらされるかということも。

「もう時間がねえな……」

誰にというわけでもなく、村瀬はひとりごちた。

12月26日、孝太と一緒に図書館に来ていた。2人が入れ替わった日にこの辺りで何か事件が起こらなかったか調べるためだ。

しかし、分厚い新聞紙を広げてみてもそれらしい記事は載っていないかった。

「あつた？」

隣で同じように調べている孝太に訊ねてみると、彼はないと首を振る。

「本当に血の跡だったんですか？」

「うーん……赤かったからそう見えたんだけど……」

改めて訊かれると、だんだん自信がなくなってきた。すると、孝太は急に立ち上がった。

「今からそこに行ってみよう」

そして、実際に孝太に血の跡を見せると、彼はしばらく考え込んでしまった。

「どう？何か思い出した？」

「全然。これも血と言われればそう見えるけど・・・見てもぴんときかないなあ」

「そうなんだよね・・・私も事故った覚えはないし・・・」

そこまで言いかけたとき、こないだ見た見た光景を思い出した。確か、トラックとか鉄パイプとか・・・

「千尋さん」

急に名前を呼ばれて、千尋ははっとして顔を上げる。

「あのとき俺、千尋さんに何か失礼なことしましたか？」

「・・・」

言っている意味がわからない。

しかし、千尋が考えている最中に孝太はなんでもないと強引に話を終わらせてしまった。

ここで事故はなかったのかもしれない。この赤い跡ももっと前のもので、千尋たちとはなんの関係もないのかもしれない。

そう思い始めたとき、視界の隅に1人の女の人が歩いてくるのが見えた。特に気にすることはなかったが、彼女が花束を持っていることに気づいて少しだけ気になってしまった。

その女性は道路の隅に花を置いて、しばらく合掌していた。肩が小刻みに揺れている。あの血の跡の近くだった。

しばらくして彼女が立ち去った後、千尋と孝太はその花束の近くまで行ってみた。

言葉に出すことはできなかった。

——ここで誰かが死んだんだ……

それから2人は無言だった。お腹がすいたのでファーストフードの店に立ち寄ったときも会話らしいものはなかった。

嫌な予感がしていた。悪い夢でも見ているのかもしれない。

……いや、悪い現実から目をそらして良い夢を見ているのかもしれない。

「まだ俺たちだって決まったわけじゃないです」

ホットコーヒーをかき混ぜながら、孝太がぼつりと呟いた。

「だって死人が出たんなら、いくらなんでも新聞に載ります。ただ、それっぽいもんはなかった」

「そ、そうだね……」

そう思わないとやっていけない。

いつのまにか天気は曇り始めていた。ひよっとしたら雨が降るかもしれない。

雨——そういえば、結婚前日も確か雨が降っていたような……

キキイイ

そのとき、ものすごいブレーキ音がした。驚いて店から窓の外を見ると、黒い車が横断歩道を乗り越えて停車しているのが見えた。だけど、千尋も孝太もそれをじっくり見ている場合ではなかった。

何かを思い出しかけた。 思い出したくない何かを・・・

第14回 誕生日会

12月27日。その日、たまたま電話のかかってきた村瀬に昨日見た花束のことを相談すると、いきなり彼はこう言い出した。

『今から貴也んち集合。孝太にもそう言っとけよ』

「は？」

相手の都合なんてこれっぽっちも考えていない男は一方的に電話を切った。

仕方なく2人して貴也の家に行くと、そこには貴也とまるで自分の家のようにくつろいでいる村瀬の姿があった。

「よお。おせーよ」

いけしゃあしゃあと彼は言つてのける。

「これでも早いほうなんだけど。なんなの？突然」

「いや、昨日俺の誕生日だったのに、誰も祝ってくれなかったからさー・・・自分で誕生日会を開くことにした」

意味不明である。

「一言言ってくればプレゼント買ってきたのに」

「義務的なプレゼントはいらねえ」

そう言つてよいしょと何かを机の上に置いた。自分で買ってきたらしい寿司だった。

「よっしゃ！孝太も遠慮せずに食べよ！俺のおごりだ」

本来祝われるはずの男は、自分で誕生日会を企画し、自分で食料を買ってきたらしかった。

「俺はちゃんとメール送っただろ？」

イカにしようゆをつけながら貴也は言う。その間、村瀬はネギト口を頬張っていた。

「おう。お前には感謝してるよ」

結局ほとんどの寿司を食べたのは買ってきた村瀬本人だった。他の人はいきなりだったため、お腹をすかせておかなかったのだ。

「あの、先生の家ゲームとかつてないんですか？」

孝太が訊ねると、あるよと答えて貴也はテレビの下を探り出す。

出したのはWiiだった。

「やっぱ誕生日会っていつたらみんなでゲームじゃないですか？」

「おー！いいな、やるか！」

村瀬が張り切ってテレビの前に陣取る。貴也と千尋も顔を見合わせて苦笑した。

気がつけば4人とも夢中になってやっていた。

「よっしゃー！」

「げっ！サイアクだああ！」

大人も子供も関係なく、騒いで笑って楽しんだ。

やりながらなんとなく気づき始めた。もしかしたら自分たちが死んだかもしれないと落ちこんでいた千尋と孝太を元気づけるために、誕生日会なんて開いたんじゃないかと……

まだゲームに熱中している孝太と村瀬を置いて、千尋は台所まで行って洗い物をすることにした。すると、貴也が手伝ってくれた。

「ありがとう」

2人で家事をしていると、まるで新婚のようだった。男同士だったが。

もし思い出したらどうなるんだろう……思い出すことで自

分はいなくなってしまうのかもしれない。

それは悲しすぎる。なんで自分がこんな目に遭うのかと悲しくなってきた。

それから・・・二度と貴也に会えなくなってしまうかもしれない自分が嫌だった。

「千尋、1日遅くなったけど、これクリスマスプレゼント」

いきなりそう言われて、予期していなかったとはいえとても驚いた。

「うつそ・・・嬉しい・・・ありがとう。開けてもいい？」

「うん」

中から出てきたのは、今日発売のCDだった。千尋の好きなグループ『アルト』のシングル。本当に嬉しかった。

「千尋が元に戻ったら、一緒にライブ行こうな」

元に戻ったら・・・千尋はどうなるかわからない。もしかしたらこの世にはいないかもしれない。

「うん。約束」

そう言うことしかできなかった。例えば、それが叶わなかったとしても・・・

「村瀬、今日はありがとうね」

今日はお礼を言っただけだと自分でも思いながら千尋は村瀬に向かう。彼は興味なさげにただ煙草を吸っているだけだった。

「別に礼なんて言われることとしてねえぞ」

「うん・・・そうかもね」

「おい、どっちだよ」

その反応がいつもどおりでほっとした。もしかしたら村瀬とこうやって話すのは最後になるかもしれない。

だから、ちゃんと言っておこうと思った。今まで言えなかった分全てを。

「村瀬がいなかったら、きっと私貴也と結婚することなんてできなかった」

「まだ結婚してねえだろ」

「それから、今回も村瀬のおかげでここまでやってくことができた」

「なんだよ。もうなんもおごんねえぞ」

「ありがとう」

素直にお礼を言うと、村瀬は少し驚いたような表情で固まってしまった。何か失礼なことでも言ったのだろうか、と千尋がとまどっている、村瀬は苦笑して煙草の火を消した。

「どういたしまして」

第15回 真実

あときはまだこんなことになっていたなんて思っていなかった。全てはすでに始まっていたのだ……

タイムリミットは、12月31日――

その日、千尋ははつきりと夢を見た。

貴也がイスに座って頭を抱えている。なんでそんなことしてるのだろう。不思議に思っても声を出すことはできなかった。だけど、そのときの彼の言葉ははつきりと聞き取れた。

「千尋……」

そこで目が覚めた。今でも鮮明に覚えている。

なんであんな夢を見たんだろう……やっぱり自分は死んだのかもしれない。1度そう感じてしまえば、そう簡単にその疑惑が頭から離れない。

無理だよ……耐えられない。

「千尋さん、ちょっといいですか？」

部屋に入ってきたのは、孝太だった。同じ境遇の彼は少しだけうかない顔をしていた。

「いいよ。どうしたの？」

「千尋さんも思ってるんでしょ？自分が死んでるかもしれないって」

何も言わないが、それは肯定を意味していた。孝太はそれ以上つつこんだことを訊かなかった。

「もう1回行ってみませんか？先生んちの近くに」

千尋は頷いて承諾した。

何度もここへは来ているが、来るたびに景色が変わって見える。

今日改めて見てみると、道路にははつきりと見てわかるほどのブレ
ーキの跡がついていた。

まるで何かを思い出すたびに1つ1つ現実に引き戻されていくよ
うだ。

花はあいかわらずそこに供えられてあった。たぶんこないだ見た
女の人のものだろう。

千尋は失礼だとは思ったが、その花を間近で見えることにした。
なんの花かはわからなかった。

「ハッピーバースデー……」

孝太の声に驚いて振り返る。一瞬そういう名前の花かと思ったが、
彼はどうやらその花についていたカードを読んだだけのようだった。

「誕生日……千尋さんっていつですか？」

「私は3月だけど……」

「俺は7月です」

どういうことだろう。この花が置かれたのは12月26日だ。い
くらなんでも離れすぎている。もしかしたらここで死んだのは千尋
たちではないのかもしれない。

だけど、2人の中に渦巻いていた嫌な予感は消えなかった。むし
ろさらに深まっていくのを感じた。

「ねえ……誰か26日に誕生日の人っていましたっけ……
？」

孝太の声は少しだけ震えていた。

千尋は頭の中である1つのできごとを思い出していた。
トラック、鉄パイプ、犬、それから――・・・・・・・・

「――村瀬・・・・」

あのとき、台所にいたときだ。千尋はなにげなく窓の外を見たら知っている緑色の服を着た人の姿が見つけた。

「あれ・・・・村瀬だ」

貴也に会いに来たのかと思ったが、様子を見ててもなかなかその場から動こうとはしなかった。

少しだけ気になって外に出てみた。と、そのとき村瀬よりも先に別のものが視界に入ってきた。

それは、鉄パイプを積んだトラックが道路の脇に停めてあった車を避けて走ろうとする。

しかし、停車中の車から犬と、そして犬を追うように少年が飛び出してきたのを見て、トラックは停車中の車にそのまま突っ込んでしまった。

キキイイ

衝撃音と共に、荷台に載せてあった鉄パイプが崩れた。

「――っ！」

気がついたら、千尋は走り出していた。そのときのことはよく覚えていない。

はつきりと覚えていることは、緑色の服を着た人が目の前に現れたということだけだった。

やっと思い出したか。

白い煙を吐きながら村瀬は空を仰ぐ。もうこの世界を見ることは
ないだろう。

タイムリミットは12月31日。49日はもうすぐだ――・・・

第16回 もう面倒はみきれない

孝太と協力して村瀬を捜すが、彼はなかなか見つからなかった。

家にも帰っていない、バイト先にも顔を出していない、駅やコンビニなど思いつく所はほとんど行ってみた。もちろん何度も事故現場にも行ってみた。

だけど、見つからなかった。

「思い当たる所他にないんですか!？」

「ないよ・・・ねえ、ここって何なの？」

それは1番疑問に思うところだった。自分たちは事故ったはずだ。それなのに怪我の1つもしていないどころか、その話題すら出ていない。

嫌な予感がする。このまま村瀬が見つからなかったら・・・

「——千尋さん・・・」

孝太の声に気がついて、千尋は顔を上げる。孝太は別の方向を見ていた。千尋もそれにならう。

「——!」

誰もいなかった。いや、誰もいなさすぎた。そこは駅前のはずだ。それなのに突然誰もいなくなってしまった。

「なんで？」

「・・・本当は俺たちはここにいない存在なんじゃないから・・・なんじゃないですか？」

それに千尋は答えることができなかった。こんな非現実的な状況を見せられて、もう何を思えばいいのかわからなくなってしまった。どうしたらいいんだろう・・・

しんと静まり返る世界。自分たち以外には誰もいないのかもしれない。

ふと思った。この世界に村瀬がいなければいいと。そうしたらきっと彼は生きているような気がしてきた。

だけど、現実には常に千尋の思っている方向とは別の方へ進む。

「よお」

目の前にはずっと捜していた人物——村瀬が現れた。

「なんとなくわかってた。お前らが思い出すの」

村瀬はいつものように軽い調子で話す。その様子は事故のことなど全く意識していないようだった。

「俺はあの事故で死んだ。たぶん」

千尋は心の中に重い石がのしかかるのを感じた。

「正確には死んだのはそれよりもずっと後だけだな。11月13日、気がついたらこうなってた」

11月13日・・・それは千尋がこの体になる1日前だった。

「49日って知ってるか？その間にあの世に行くんだよ」

まるで他人事のように村瀬は言う。対する千尋たちはあの世という言葉を聞いただけで動けなくなってしまった。

「なんで・・・？ここはどこなの？」

声が震える。

「ここはお前らが作り出した世界だ。お前ら2人とも自分のせいで俺が怪我したって思い込んで、現実の世界じゃ意識不明なんだよ。なんか精神入れ替わるっていうややこしいことにもなりやがって・

・こんなんじやすんなり天国に行けねえだろうが」

困ったように笑って村瀬は言う。

「ほんと俺が事情を説明すればよかったんだけどな……俺自身がもうちょっとこの世界を楽しみたくて言わなかった。現実世界でお前らを心配してる人たちには悪いことしたな」

孝太はそのとき、事故のことを考えていた。

リッキーが飛び出し、自分も後を追ってすぐ女の人と男の人が現れた。そして、気がついたら男の人が血まみれで倒れていた。

まず最初に思ったことは……俺のせいじゃない、だった。自分が感じていた罪悪感の正体はこれだったんだ。

情けない。新しい場所ではそういう自分から生まれ変わろうと思っていたのに、ちっとも自分は変わっていなかった。

そう思ったときだ。孝太は何かに後ろ襟首えりくびを掴まれる感覚を覚えた。

そして、気がつくと、体が宙に浮くように感じていた。

村瀬は2人の変化をその瞳でしっかりと見ていた。

とうとうこのときが来たんだな。そう思うと少しだけ寂しさを感じるような気もしてきた。

千尋と孝太の驚く表情が見て取れる。

もう2人は元の世界に戻ろうとしている。真実を知って、あるべき場所に戻らなくちゃいけないから。

ここは2人にとって自分を守るための世界だった。

だけど、いつまでもここにいるわけにはいかない。

自分が逝く前に2人をちゃんとあるべき場所に帰すこと。それが村瀬の役割だと思った。

「たく、世話がやけるんだよ。千尋も貴也も、俺がいなきゃ話すこともできなかったくせに……誰のおかげでここまで来れたと思ってるんだよ。」

ほんとに……ほんとに……
もう面倒はみきれねえ。後は自分らでやっつけよ。

「村瀬！」

必死にこっちに手を伸ばそうとしてくる千尋を村瀬は見た。
違うだろ。この手を伸ばすのは俺じゃねえ。お前のことは貴也が幸せにしてくれる。あいつはそういうやつだ。守ると決めたら絶対守ってくれる。

1つだけ欲を言えば――

「村瀬……！」

「はっ？」

そのとき、強引に腕を掴まれた。それと同時に村瀬も何かに引っ張られてしまった。

――その手を俺が守りたかった。

最終回 まさか

あつたかい……って思ってたのにすきま風だろうか。顔が寒くなってきた。

「……………」

目を開けると、白い天井が広がっていた。まぶしくない電灯があるが、今そこを照らす明かりがそれではないことに気づく。なんとなくそこがどこなのか、千尋はわかっていた。

ゆっくりと上半身を起こしてみる。自分の体だ。少しだけ重いような気がする。

病室の中には誰もいなかった。ベッドの近くにはイスがあるだけだった。

千尋は点滴につながれていないことを確認してから病室を出た。

自分の体を確認しながら廊下を歩く。大丈夫。うん。今何時なんだろう……全然人がいない。

千尋はとりとめのないことを考えながら、別のことを考えないようにしていた。っていうことを考えないようにした。

気がついたらなんだかよくわからない廊下まで来ていた。千尋は誰かの足音に気づいて振り返った。

廊下の向こう側、そこに誰かが立っていた。

その人物は走ってこっちまでやって来て、２メートル先で立ち止まる。それ以上近づいていいのかわからないというようにも見えた。

「貴也……………」

その瞬間、千尋は貴也によって抱きしめられていた。

「千尋…………千尋……………」

何度も何度も貴也はその名を呼ぶ。彼の体は震えていた。千尋は彼の背中に手をまわした。

「貴也あ……………」

泣きじゃくった。子供のように泣いた。お互いの名前を何度も呼んで、意味もなく謝った。

少しして落ち着いてきた。千尋は消え入るような声で呟いた。

「村瀬は……………」

その言葉に、貴也は千尋の体を離した。すごく言いにくそうにしているのがわかった。

それだけでわかった。

「——私…………私が村瀬を巻き込んだ……………」

「違う。村瀬は自分から千尋たちを守ったんだ……………」あいつはそういうやつだから」

そういうやつ…………うん、そうだよ。死んでも他人の心配して…………あいつほんとにバカだよ…………ほんとに…………

ほんとに涙が止まらないよ…………

その後、簡単な検査や警察の取調べを終えて、千尋はすぐに退院することができた。その際に孝太にも再会することができた。けど、お互いに何も話さなかった。だって2人が関わることは本来なかったのだから。

貴也はずっと傍にいれくれた。貴也なら守ってくれると言った村瀬の言葉を思い出した。

結局、これはただの事故として片付けられた。千尋たちがなかなか目を覚まさなかったのも事件のショックということになっていた。

月日が流れると共に、このことは忘れ去られていった。

だけど、千尋だけはこのことを忘れないと誓った。今こうして自分が生きているのは他ならぬ村瀬のおかげだ。彼の分も精一杯生きたい。

だから忘れない。絶対。

——2年後。千尋と貴也は結婚した。

その夜、2人は新しい家には戻らず、式場の近くのホテルに泊まった。

「貴也、今日から改めてよろしく願います」

「いえいえ。こちらこそよろしく願います」

2人は丁寧な頭を下げて笑い合った。

大勢の人に祝福された、人生で最も幸せな1日だった。だけど、ここに本来来るはずだった人物が来られなかったのは寂しい。

千尋の考えていることがわかったのだろう。貴也がレストランに行こうと言い出し、千尋は頷いた。

1階のレストランは混んでいた。2人は30分並んでようやくテーブルに座ることができた。

ウェイトレスはまだ来ない。

「・・・・・・・・・・」

代わりに、隣に座る女の子と目が合った。彼女は交互に千尋と貴也を見る。

「結婚おめでとう。さっき見えた」

彼女は気さくに話しかけてきた。2人は顔を見合わせてからありがとうと言った。

だけど、女の子の次の言葉は、

「ほんとだよ。世話がやけるよ・・・」

ん？耳を疑って再度女の子を見ると、彼女ははにかんだように笑って走り去ってしまった。

入れ違いにウェイトレスが来る。

「ご注文をお伺いいたします」

「まさか・・・」

「はい？」

「まさかねえ・・・・・・・・」

最終回 まさか（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。
結構暗い話になってしまいました…許してください…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9864f/>

チェンジ。

2010年10月9日06時08分発行